

ボランティア養成セミナー

～できることから始めてみよう～

報告書

国立赤城青少年交流の家では、「ボランティア養成セミナー～できることから始めてみよう～」を平成27年5月16日（土）～5月17日（日）の1泊2日の日程で実施しました。本事業はボランティアに興味のある県内外の高校生以上を対象とした事業で、高校生7人、大学・専門学校生25人、社会人1人の合計33人。男女の内訳は男性が15人、女性が18人の参加でした。

内容は講義を通して青少年教育の理解や施設の現状を把握し、実習を通して野外炊事を行ったり、救命救急法の意義や技術を習得しました。また、ワークショップでは参加者それぞれが抱くイメージや思いを語り合いました。最終日には実際に活動している赤城法人ボランティアが、昨年度の主催事業の活動の様子や運営側として携わったときの感想などを参加者に発表しました。

< 講義：「青少年教育の理解」・「青少年教育施設の運営と現状」 >

講師：文教大学 人間科学部 専任講師 青山 鉄兵 氏



「青少年教育の理解」ではアイスブレイクから始まり、小グループ同士の自己紹介やフリップディスカッションによる参加者同士の交流を深め、和やかな雰囲気で行われました。

「学校以外で学んだ経験は？」という問いが参加者に投げかけられ、個々で考えたことを小グループで共有する時間も設けられました。教育は学校だけでないことを理解した上で、学校以外で子どもは育つことやその環境や支援する仕組みに目を向けることなどの話がされました。

また、子どもの体験不足についてもふれ、自然に体験してきたことを「わざわざ体験させる」ことの難しさなどの話がありました。何をどうやって体験させるべきかを考え、大切なのは体験をすることではなく、活動のプロセスに注目し、「何のためにするか」であることを強調されました。

「青少年教育施設の運営と現状」では、小グループに分かれ、当所の施設に教育的な仕掛けにはどんなものがあるか写真撮影をしてみようという課題があり、看板や朝・夕のつどい、退所点検、宿泊室などに注目し青少年教育施設について考えました。

ボランティアという視点から子どもとの関わりをとらえた「ナナメの関係」や「成長の循環」という話から、ボランティアとして施設にかかわることは子どもたちにとってだけでなく自分たちにもプラスになるという内容の話に、参加者は真剣に耳を傾けました。

最後に、青山先生からボランティアにとって大切にしたい「関わること」「遊ぶこと」「悩むこと」の3つのことを話され、1人1人にとっての「次への一歩」を踏み出して欲しいと参加者にエールを贈りました。

<実習：野外炊事>

講師 赤城法人ボランティア



野外炊事では「ドラム缶ピザ作り」に挑戦しました。赤城では人気のある活動プログラムとなっています。ボランティアスタッフが作り方の説明や作業の補助をすべて担当して行いました。参加者は6班に分かれ、参加者同士の交流の輪が広がるようにするために同じ学校の友人同士がばらばらになるような班編制にしました。

ピザ生地をこねる工程、思い思いのトッピングやドラム缶でピザを焼く工程などすべてが初めてのことばかりで、わくわくしながら取り組んでいました。また、生クリーム、チョコレートソース、バナナなどをのせるデザートピザにも挑戦しました。

最初は緊張気味だった参加者も段々と打ち解け、ピザが完成するころには会話も弾んでいました。参加者にとっては大満足の内容でした。

<ワークショップ：「ボランティア活動の意義」>

講師 赤城法人ボランティア

「ボランティア活動の意義」ではワークショップ形式で話し合いました。赤城で法人ボランティアを長年勤めるスタッフが進行役となり、他のスタッフはグループに入って討議に参加しました。

参加者が「ボランティアと聞いてイメージするもの」を付箋紙に書き出し、グループ化しました。ボランティアに対するイメージや思いを確認し、他者と交流し合うことによって、漠然としていたボランティア像を具体化していきました。また、ボランティアの活動



の意義を考え、何のためにボランティアをするのかを個人で書き出し、説明、グループでランキング、発表をしました。

後半はフリートークの時間も設け、打ち解けた雰囲気の中でボランティアについて熱く語る参加者同士の交流もみられました。参加者のアンケートには「自分とは異なる考えをすることができました」、「世代を超えた人との交流が持てるよい時間となった」との感想が書かれていました。

< 講義・実習：「救命救急法」 >

講師 大東文化大学 スポーツ・健康科学部 教授 中村 正雄 氏

活動は講義形式でスタートしました。実際の救助活動を行う上で気をつけるべきことを動画やスライドによって確認し、リスクマネジメント、安全対策、救急救命法など救助者自身が安全を確保しながら人命救助するための基本的な知識を学びました。講義後は6～7人程度の班を編制し、実技講習としてCPR（心肺蘇生法）とAEDの使用方法を実際に体験しました。



参加者にとっては講義も実技も新鮮な内容で、みな真剣に受講していました。また、アンケートには「まさかの場合、自分にもできることがあるんだなと思いました」という感想もあり、経験者にとっても学びのある内容でした。

最後に中村先生から「正しい知識や技術があれば高い効果が期待できるが、それがないからといって何もしないよりは、目の前にいる人の役に立ちたいと思って何かをしようとするのが大切です。今ある技術は未熟でも、研修や経験で磨くことができます。これは救急法だけでなく、ボランティア精神にもつながるはずです。」とまとめの言葉があり、参加者がその言葉に頷いていました。

< ボランティアの活動の実際 >

講師 国立赤城青少年交流の家職員
赤城法人ボランティア



交流の家の事業に参加した先輩ボランティアが主催事業についての紹介をしました。実際に活動をしている赤城法人ボランティアが、昨年度までの活動の様子や運営側として携わったときの感想などを参加者に発表しました。発表者の思いの詰まった内容でした。

参加者からは「それぞれの活動は何をしているのか、何を感じているのかを知ることができました」、「実際にやっているボランティアの話を知り、やってみなくなりました」、「沢山の写真と体験談が良い刺激になった」など活動の魅力が伝わりました。

【事業を終えて】

今回の事業は、赤城法人ボランティアが中心となり企画から運営まで行い、参加者がその姿を見て「自分もやってみたい」と感じられるような内容を考えました。

アイスブレイクの進行から始まり、野外炊事、ボランティア活動の意義の講師、事業全体の進行、すべての活動の裏方までボランティアが中心となって事業を運営しました。

参加者とボランティアの距離が近くなり、青山先生の講義の中で述べていた「ナナメの関係」を参加者自身が感じられたと思います。また、専門学校生が多く、参加者に偏りがありましたが、「交流の輪が広がり、様々な人の体験談を聞いたのが良かった」という声もあり、年代を超えての交流ができたことも良かったと思います。

最後に、参加者のうち24人がボランティア登録をしました。参加者がボランティア登録をした、しないではなく、それぞれの場所、立場で「できることから始めてみよう」というアクションを起こすことに期待したいと思います。

担当 企画指導専門職 根本 純一

